

研究経過報告

二 宮 克 美

1. 個人研究について

「児童の道徳的判断の発達」に関する内外の研究論文を、昨年に引き続き、整理しながら読んでいる。いずれ、これらの文献をまとめ展望したいと考えている。

一昨年、児童の道徳的判断の発達過程におけるGutkinの4段階が、Baldwin & Baldwin (1970)の「親切さ」の判断にもみられるのかについて検討を加えたが、ようやくその研究を英文「Developmental sequence in children's judgments of kindness」でまとめ終えたところである。

この他、最近Turiel (1983)の「社会的ルール」に関する研究に興味をもち、その検証の端緒として非常に初歩的な調査を実施した。その結果の概要は、10月中旬の日本心理学会第48回大会で、「小学生の社会的ルールに対する意識」と題して発表する予定である。

2. 共同研究について

久世敏雄教授を中心に進めてきた青年の社会的態度に

関する研究は、今新たな局面を迎えている。これまでの研究をまとめつつ、次の新たな研究をどのように進めていったらよいか真剣に論議している。これまでの研究の成果は、逐次本紀要に報告してきたが、今回は「青年期の社会的態度に関する縦断的研究：保守的態度、革新的態度に関する質的検討」としてまとめられている。なお、この論文以外にも2編の論文をまとめているところである。

この他、大学院生の宗方比佐子と共同でEisenberg-Berg (1979)の提起したプロソーシャルな道徳的判断について、保育園児から高校生までの幅広い年齢層で検討を加えた。この結果の概要は、9月下旬の日本教育心理学会第26回総会で発表する予定である。また、この研究の成果は「プロソーシャルな道徳的判断の発達」と題して論文のかたちにとまとめたところである。

(昭和59年8月31日記)

研究経過報告

村 上 隆

82年8月から84年7月までの経過について述べる。

1. 3相データの因子分析

昨年本紀要に発表した論文(“3相データにおける因子変化の記述のための諸方法(I)”)以降に実質的な進展はない。ただし、実際のデータへの適用の経験と、若干のシミュレーションの結果が蓄積された。いわゆる因子変化の探索的記述方法としては、まとめの段階にある。

この副産物として、変数が幾つかのブロックに分けられている場合、各ブロック毎の因子分析と、ブロック間の因子得点間相関とを同時に推定する、“多ブロック因子分析”とでも名づけられるような方法が生まれた。実際のデータへの適用の結果、かなり解釈の容易な結果が生み出されており、実用性はありそうである。

一昨年のこの項で予告したSD型データに適用可能なモデルについては、ずっと手つかずのままであったが、最近、大学院生廣岡秀一氏とともに着手した。多分一年

以内に何らかの成果を公表できると思う。

2. 敬語規範のモデル

これについては、LISP言語によるコンピュータ・シミュレーションを行なった。その内容は、“LISPとことば(II)——敬語規範のシミュレーション”(名古屋大学大型計算機センターニュース, 14, 451-468), 及び“敬語規範のコンピュータ・シミュレーション”(わが国における人間関係の比較的・総合的研究報告書)に発表した。モデルの改訂と、経験的データとの照合が今後の課題である。

3. 消費者行動の調査

昨年度、愛知県が経済企画庁の委託のもとに行なった“消費者の購買行動と物価情報に対するニーズに関する調査”に、愛知学院大学林英夫助教授とともに参加する機会を得、同報告書の約半分を執筆した。サンプリングに若干の問題があるとはいえ、このような大規模調査に

関わるのは初めての経験であり、大変良い勉強になった。結果の一部は今年度の日本心理学会大会で口頭発表される。またこの分析の過程を通じて、調査データの分析をめぐってさまざまなことを考えさせられた。この点については、4、5項とも関わりがある。

4. 外国人のための日本語能力認定試験

社団法人日本語教育学会が国際交流基金の助成のもとに進めている調査研究に、昨年度から調査認定委員として加わる機会を与えられた。これは専ら分析要員として加わっているにすぎないが、報告書（「外国人のための日本語能力認定試験に関する調査研究の報告書 日本語教育学会」を総合言語センター大坪一夫助教授とともに執筆した。これまた能力測定データの扱う初めての経験であり、いろいろ学ぶところが多かった。テスト得点の等化（equating）をはじめとする、種々の問題を解決していくためには、より進んだ測定モデルに依拠する必要がある、同調査は今年度も継続中であるので、検討してみたい。

5. Rasch のモデル

内田良男教授の監視で進められている、Rasch, G.

「Probabilistic Models for Some Intelligence and Attainment Tests」の訳業に参加している。実は一昨年、一時休止を宣言した、精神物理的尺度構成の問題と個人差測定をつなぐモデルとして、かねてからこのモデルには関心を有していたのであるが、今回詳細に検討する機会を得て、そのこと以上に統計的モデルとしての完成度の高さに一種の衝撃を受けた。

3、4において述べたように、現在、このようなモデルを実際に適用する場には恵まれており、さまざまな場面への応用可能性を検討することに早急に着手したいと考えている。

今日、個人差測定の尺度構成の方法論は、実用的にはともかく、理論的には決して満足のいく状態にあるとは言えない。このモデルを手掛りに、この点についても考えていきたい。

なお、極く最近、教育学科藤田英典助教授とともに、コーホート分析の識別性の問題について、初等的な検討を開始した。若干の興味ある事象が見出されているが、詳細は次年度以降に述べることにしたい。

（昭和59年8月31日記）

研究経過報告

若 林 満

1. 研究活動と学会報告

当研究室を中心に、昨年度よりの継続研究と今年度から新しく始まった研究を加え、現在いくつかの研究プロジェクトが進行している。新規プロジェクトとして、第1に組織パーソナリティの研究があげられる。この研究では人びとが組織（企業、学校、行政体など）に対して抱くイメージの構造と、その変化の問題が究明される。現在、院生の中村雅彦君の協力を得て作業が進行中である。第2は日本版 WAMS（Women As Managers Scale）の作成であり、院生の宗方比佐子君の協力を得て、L. Peters らが行った研究を基に質問紙が構成され、現在調査が進行中である。以上に加え、昨年度からの継続として、女子短大生の職業選択過程の研究が、後藤宗理、鹿内啓子先生との共同研究として進展し、今年は昨年度の follow-up 調査が実施された。この研究の成果は、本年度の日本心理学会および東海心理学会において連名で発表された。第2に、「職場のリーダーシップと仕事のやりがい」研究は、昨年度に加えて今年度のデータが蓄積され、目下分析作業が進行中である。成果は一部公表

されたものの、学会での発表は来年度からと考えている。第3は D. Gallagher 教授との、働く人びとの組織忠誠心（commitment）に関する共同プロジェクトであるが、現在約8千名分のデータの輸入を終え、粗集計の作業にとりかかっている段階である。成果の発表は来年度となろう。第4に「わが国産業組織における大卒新入社員のキャリア形成に関する研究」は、今までの follow-up 研究が一応終了し、本年度の日本心理学会において南隆男先生（慶応義塾大学）との連名で、主要な成果が報告された。なお、このプロジェクトでは1985年1月より、米国 Cincinnati 大学の George Graen 教授を本教室にお迎えすることを契機に、来年度再び follow-up 調査が行なわれる予定となっている。第5として、昨年度キャリア発達研究会が東海4県の主要国立大学の新入生を対象に実施した職業意識に関する調査であるが、現在分析が中断しており、今後早急に成果のとりまとめを行なっていきたいと考えている。第6として、石田科学経済研究財団からの研究費助成を受けて実施していた「わが国産業組織における管理的職務経歴の形成に関する実